

## カタカナの飛躍を！

2015年1月15日

日本国際フォーラム参与  
元駐ポルトガル大使  
原 聡

昔、入門中国語を勉強したことがあった。そこで、漢字だけを用いている中国語では外来語の表記に苦勞することを知った。ゴルフは高尔夫球、コカコーラは可口可乐となる。漢字の音のみを利用して外来語を表記しているが、中国では漢字の発音が地域によって異なっているために外来語表記も異なることがあり、なかなか複雑である。

表意文字として日本に伝わってきた漢字は、私たち日本人にとって優れた言語として取り入れられ、生活、行政、文学などあらゆる面で日本文化を支えてきてくれた。しかし、「やまとことば」を使っていたわれわれの祖先たちは、「やまとことば」を漢字だけで表すことに不便を感じだした。万葉集は、表意文字としての漢字と、音だけを借りて表す表音文字としての漢字とが、両方混在して書き表されている。例えば、「石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨」と書かれた志貴皇子の歌は、「石走る（いはばしる） 垂水（たるみ）の上の 早蕨の 萌え出ずる春に なりにけるかも」と読まれる。「左和良妣乃」の部分のように、表音文字としての漢字と、石や春などの表意文字としての漢字とが一緒になって用いられている。

その後奈良・平安時代になって、仏僧たちが漢文を日本語として読み下す際に、文の余白に小さく訓点として万葉仮名を付記し始め、その後徐々にその簡素化、省略化が進んで、カタカナ（片仮名）が生まれたといわれる。このようにカタカナは誕生の時から記号や符号として用いられるという、技術的文字としての性格を有している。平仮名が女手と称されて和歌や消息などに用いられ、文学や書道において美的価値を持つものとして認識されたのとは異なる。鎌倉時代以降、片仮名は漢字とともに仮名交じり文として公文書などに用いられ、明治時代においても同様に憲法や刑法、民法などに広く利用された。

今日のカタカナの主な役割は、外来語の表記に用いられるというところにあるといつてよいだろう。読者は、日本語のローマ字綴りにおいてヘボン式という言葉を知ったことがおありになるに違いない。ヘボンは名前であるが、どのような言語かと思って、昔、

調べたことがあった。結果は英語、それも Hepburn であった。今なら、(オードリー・)ヘップバーンと書き表される。明治の時代に来日した Hepburn 氏は自分の名前をヘボンと名乗り、書いたのである。また、当時の日本人もそう聞いたからヘボンの名が定着したのだろう。母語が英語である人々がこの名前を発音しているのを聞くと、ヘッパンと言っているように聞こえる。もし読者が英米人に対してカタカナでのヘップバーンという発音をすれば、これを Hepburn と理解する英米人はほとんどいないだろう。神戸にメリケン波止場という場所がある。アメリカ領事館の前の波止場ということで、American が語源であるが、当時の日本人はアメリカン波止場とは呼ばななかった。耳で聞いたままに呼んでメリケンとなった。メリケン粉も同様である。明治の人々の耳は研ぎ澄まされていた。

今日、日本人の多くが外国語習得に熱意を燃やしている。自分の反省を込めてであるが、学校で習った英語は「読む英語」だった。決して「聞いたり話したりする英語」ではなかった。その結果、筆者が英語をどうにか話せるようになったのはやっと 20 歳代になってからであった。目で見えた英語と、耳から聞いた英語は、ヘップバーンとヘボンの例のように異なる。じゃあ聞いて覚えればいいではないか、と識者は言うかもしれない。しかし日本人の多くは、まだまだ目から覚える傾向から抜け出せないでいる。戦後 70 年の歴史において、その傾向は未だ変わらないようである。明治以来これまでの流れや、日本人の恥じらう性格などを考えれば、今後相当長きに亘って、日本人は英語を目で見ながら読んで覚えるという習性からなかなか抜け出せないのではないかと思われる。

他方、日本人の国際化の必要性は口がすっぱくなるほど言い続けられてきている。若者の内向き傾向も案じられている。外国語、特に国際的通用語となっている英語の習得は、日本の将来のために不可欠である。お隣の中国人の英語力、特に会話力の伸びには目を見張らせられる。

そうすると、日本人は今後とも英語を目で覚える可能性が高い、それも結構カタカナ表記の英語発音に慣れ親しんだ上で英文の英語に挑戦していくことになるだろうという前提で、何らかの対策を考えるのが近道ということになる。そこで筆者は、文部科学省や国語審議会、その他の識者の方々に、日本の表音文字であるカタカナをもっと飛躍させて頂きたい、とお願いしたい。

もちろんこれまで識者たちの努力によってカタカナの表記法は精一杯の改善が進められてきた。バイオリンをヴァイオリンと表記してもよいし、また、アイデンティティーという難しい言葉もカタカナ表記ができるようになっている。進歩は見られる。他方、

古代から使われてきた母音の中には、今日使用されなくなってしまったものもある。エ、オ、ウ（ゑ、お、を）などの母音は、「を」を除いて今日なくなってしまった。これは、むしろ日本語の発音の退化ととらえてもいい例かもしれない。

しかし、外国語の発音は一般に今日の日本語の発音と比べてより複雑である。ドイツ語の **Goethe**（ゲーテまたはギョイテ？）などのように、日本語の音としては存在しないものもあるし、中国語の音も日本語にはないものが多々ある。全世界の言語を対象に検討できればよいが、そうするとカタカナという日本語から離れて、表音文字一般の問題を取り扱うことにもなりかねない。そこでまずは、日本人が今や普段に使うようになってきている外国語そして国際社会で最も広く通用している言語、すなわち英語に絞って表音文字であるカタカナ表記を再検討してみてもどうかと考える。その検討の一助として、現在のカタカナのままでは英語の発音を表記することに困難を伴う例をいくつかあげてみたい。

子音 ・ **sh** と対比しての **s** の発音： **ship, simple**

国際音声記号では、英語の **sh** は現状では [ʃ]、**s** は [s] というように、異なる音として表記される。しかし、カタカナではシップ、シンプルのように「シ」と表記されて区別されない。

サ行は、カタカナではサシスセソとなるが、これをローマ字表記すれば、**sa, shi, su, se, so** となり、シだけが **shi** となってサ行の他の音と不整合で異質である。

また、シャ行は、シャシシュシエシヨ、**sha, shi, shu, she, sho** となり、やはりカタカナ表記の上ではシのみが異質である。

この日本語カタカナの不整合を是正する必要がある。

・ **th** の発音 [θ]、[ð]： **Thatcher, Elizabeth, the, other**

英語のこの音は **s** や **z** と異なっているにもかかわらず、カタカナでは、サッチャーやエリザベス、ザ、アザーのようにサ行、ザ行で表記されており、正しい音が表記できていない。

・ **r, l** の発音 [r]、[l]： **right, light**

[r] と [l] の二つの音が全く異なることはほとんどの国では周知の事実であるが、日本語では区別されておらず、カタカナではラ行の「ラリルレロ」と **r** も **l** も同じように表記されており、日本人には世界の常識が理解できにくくなっている。カタカナのラ行の音は [r] と [l] のどちらでもない音といえようが、強いてどちらかといえば [l] の方に近いかもしれない。

・ **f** の発音 [f]、[h]： **food, hood**

**f** についてはフィの表記が可能である。しかし、**food** と **hood** は英語では

異なる発音であるにもかかわらず、カタカナではいずれもフードと表記され、区別できていない。

本来、ハ行のフ (hu) と、ファ行のフ (fu) とは異なる音のはずであるが、カタカナでは同じフと表記される。

ファ行は、ファフィフフェフォと表記され、カタカナ表記上はフのみが異質である。

・ [t] [d] : cat, bird, try, dry,

日本語では子音と母音が一体になって発音されることが多いため、子音[t] [d]のみの発音は存在しない。従って、t、d の発音をカタカナ表記する場合には、「ト」「ド」というぐあいに母音の[o]がくっついた音の表記、即ち、[to][do]とならざるを得ず、子音[t] [d]のみの発音との区別が出来ない。末尾に来る t、d をカタカナで「ト」「ド」と表記した場合には、cat はキャット、bird はバードと表記され、英語の実際の子音の発音とは大いに異なる。カタカナで子音[t] [d]のみの表記ができれば、ずっと分かりやすい。

上記以外にも、英語の母音の発音で girl (少女) の[a]や cat の[æ]のように日本語の発音としては存在しないものはまだまだたくさんあり、これらについてもカタカナの改善が出来れば望ましいことは言うまでもない。しかし、いちどきに多くの改善を遂げることには困難もあろう。筆者の見るところでは、上記以外の英語発音は、現在のカタカナ表記で若干無理はあっても曲がりなりにどうにかこうにか対応できない訳ではないように思われる。

少なくとも上に挙げたような英語の子音や母音について、カタカナ表記において何らかの改善・飛躍を実現しようではないか。そうすれば、21 世紀の大人たちの中には英米語の発音を熟知する人たちも増えているだろうから、日本の子供たちが幼少時からカタカナを習う際に自然と、日本語本来の発音に加えて、大人たちが話す英語の発音を耳で聞く機会も多くなり、英米語の発音をカタカナで書き覚えていくことになるに違いない。そして、それは日本人一般が国際語たる英語により慣れ親しむための簡便かつ有益な方法となるだろう。

では、どうすればよいのか。実は、戦前の台湾統治時代に、日本語にはない発音を有する台湾語を日本語で表記するために、カタカナに工夫を加えて台湾語仮名が試みられていた。過去の歴史を紐解いて、優れた試みを参考にしつつ、現在のカタカナに最小限の工夫を加えて、カタカナを使って英語の発音をより現実の発音に近い形で表記するようにはしてはどうだろうか。

具体的には、例えばの一案であるが、次のような工夫・改善をもってカタカナを飛躍させることを、識者の方々にご検討いただけないであろうか。（赤文字が新たに導入するカタカナ。）

[s] に対応するカタカナ：シ（新文字） 例：simple シンプル

[ʃ] に対応するカタカナ：シ（現状を維持） 例：ship シップ

[θ] に対応するカタカナ：サ、シ、ス、セ、ソ（新文字）

[ð] に対応するカタカナ：ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ（新文字）

[l] に対応するカタカナ：ラ、リ、ル、レ、ロ（現状を維持）

[r] に対応するカタカナ：ラ、リ、ル、レ、ロ（新文字）

[t] に対応するカタカナ：ト（新文字）

[d] に対応するカタカナ：ド（新文字）

[f] に対応するカタカナ：フ（新文字） 例：food フード

[h] に対応するカタカナ：フ（現状を維持） 例：hood フード

[v] に対応するカタカナ：ヴ（現状を維持） 例：five ファイヴ

このような新たなルールを作成し、国民の利用に供してはいただけないものだろうか。これに従えば、カタカナ表記は、seatシート、Elizabethエリザベス、ringリング、flowerフラワー、hoodフード、earthアース、friendフレンド、birdバードという具合になる。

もちろん、以上に加えて[a]や[æ]の音に対応するカタカナも工夫していただければ、それに越したことはない。[a]や[æ]の発音はカタカナの「ア」とは異なっており、英語を母語とする人々は「ア」の音に近い[a]と、[a]や[æ]の音とを厳格に区別している。しかし、既述のように、いちどきにカタカナをあまりに複雑にしても皆が付いていけなくなつては元も子もない。従つて、[a]や[æ]については将来の検討にゆだねることもあり得るだろう。

もちろんこの新カタカナ導入後も何世代かの間は、従来の表記法と新表記法を併用することが必要だろう。バイオリンでもヴァイオリンでもどちらでもよいとしている現在の政策と同様の方針を、相当の期間、新カタカナ表記法にも適用するのがよいだろう。当分の間は、新表記法でどのように表記したらよいか分からない人もいるだろうから、その場合には従来の表記法で書き表わしてもらえばよい。それでも従来表記法に慣れ親しんだ人たちが新表記法に出くわしたときには、「何だ、この訳の分からない表記法は！」とのお叱りの声も聞こえそうである。しかし、台湾統治時代に台湾語の発音をカタカナ表記しようと当時の為政者たちによって意識的な努力がなされたように、しっかりした意図的な政策なしには、日本の子供たちは引き続き、「右」や「正しい」の **right** をライトと書いて日本語のラの発音で読み、「光」や「軽い」の **light** との区別を理解しない状態がいつまでも続くことになる。それが子供たちに誤った先入観を与えて、**right** と **light** の区別があること自体を理解しない期間が長く続き、その結果、**r** と **l** を区別できない、混然とした言語の基礎が子供時代に築かれてしまう。これまでの反省を込めていえば、これが私たち世代の外国語学習の上でいかに大きなマイナス要因となってきたことか。今や抜本的対策を打つ時期が来ている。

他方、上記の私の考えを読んで、英語に傾倒する余り日本語教育に対する私の熱意が不十分であると受け取られる向きがあるとすれば、それは大いに間違っている。私の持論は、外国文化の流入の激しい今日、子供たちに対する日本語教育は決しておろそかにされてはならない、というものである。特に小学校において子供たちが日本語をしっかりと理解することは、日本文化を身につける上での基本である。従って、カタカナ新表記法の導入が決して漢字やひらがなについての教育をおろそかにすることにつながってはならない。

小学生の時から英語を教えるとの動きが強まっているようであるが、むしろ私は、まずは漢字やひらがなといった日本語をしっかりと学習することが必要であるとの意見である。その基本を踏まえた上で、カタカナを使って外来語たる英語の真の発音をも知るために新表記法を教えていくこととし、その後、中学、高校では、古語をも含む日本語に親しみつつ、話し言葉としての英語を身につけるのが本筋と考える。畢竟、言語は文化である。日本文化の原点は日本語を深く知ることにあると考える。

カタカナの新政策を導入した後は、あわてることなくゆっくりと普及を見守ればよい。21 世紀においては、数十年かけて世代が変わるにつれて、徐々に英語にも慣れ親しんだ親たちが増え、それらの人々は新しいカタカナ表記法に有用性を感じ出し、子供たちのためにもそれがよいと思うようになるだろう。何も難しい [ʃ]、[e]、[ä] などの「国際

音声記号」を子供たちに教え込む必要はない。表音文字であるカタカナで十分であり、むしろそれが分かりやすいし、望ましい。

明治時代のように、もう一度英語の発音に耳を研ぎ澄まそうではないか。きちんと聞きながら、実用的かつ技術的の文字である表音文字のカタカナを更に一段飛躍させようではないか。カタカナの飛躍によって、21 世紀の国際社会において日本人がより大きな役割を果たすことになり、その地位を高めていくことを、私は願っている。

(了)